

## 人間の尊厳と平等主義：カントにおける「人間性の定式」に関する考察

高木裕貴（京都大学）

カントは『道徳形而上学の基礎づけ』において「汝の人格や他のあらゆる人の人格における人間性を、いつでも同時に目的として扱い、決して単に手段として扱わないように行なせよ」(IV429) という定言命法の「人間性の定式」を提示した。「人間の尊厳」の概念史という観点からすれば、この定式においてカントが①尊厳概念を世俗化したこと、②あらゆる人間が尊厳をもつという平等主義を確立したことは大きな意味をもつと言える。

しかし、②に関してはすでに異論が提示されている。古代における尊厳概念のように尊厳を何らかの卓越性や功績に求める際には、あらゆる人間が例外なく尊厳をもつという平等主義が崩れてしまうが、とりわけ Darwall [2008]が強調しているように、『基礎づけ』や『実践理性批判』においてカントはまさに自律や善意志という道徳的卓越性に尊厳の根拠を求めているように思われるのである。

私見によれば、②を意識してのことか、人間性の定式が近年に注目されるきっかけを作った Korsgaard [1986]や Wood [1998]に始まる英語圏の研究はこの問題に一定の解決を与えているように思われる。彼らがとりわけ注目するのは、ドイツ語圏のカント研究においてさえあまり取り込まれることがなく、むしろネガティブな評価がなされてきた人間性の定式の演繹である。カントは『基礎づけ』において人間性の定式を提示する直前にその演繹を展開している。私なりにその演繹のポイントを述べるならば、カントは「あらゆる理性的存在者が自己を目的自体として表象する必然性」から人間性の定式を演繹している。この点について彼らは、人間の尊厳は何らかの道徳的卓越性ではなく、単なる「目的設定能力」に基づくと考えることで、この演繹に説得的な解釈を与え、かつ平等主義を確保しているように思われるのである。ところが、彼らの解釈では、自律・道徳性と尊厳の関係性が希薄になってしまうという、カント解釈上大きな問題が生じてしまう。

そこで本稿では、自律と尊厳の関係性を認めつつも平等主義を保持する解釈を探求する。そのためにまず、カントが提示した人間性の定式の演繹がもつ構造を解きほぐし、問題点を浮き彫りにする。その上で、カントの演繹に従えばコースガードらの解釈は実際には彼らの意図に反して平等主義を保持することができないということを示す。さらに、目的設定と自律を区別した上で、『基礎づけ』における自律概念と人間性の定式の演繹を検討する。最終的に本稿では、形而上学的概念たる自律に尊厳の根拠を求めることで、尊厳の平等主義を保持できると示す。自己のみならず他者をも内包する自律を必然的に自己に帰属させることによってのみ、平等主義が確立されるのである。このようにして、カントの尊厳概念の本性が明らかになる。また同時に、尊厳の概念史におけるカントの独自性も明らかになるだろう。